

今年の二月、文芸社より「奇妙な喫茶店」を上梓した。一部地域で予想外に好評だった。松本を中心とした長野県である。企画頭書から文芸社の助言情報を得たことも大変嬉しく、担当者の方々には感謝の他はない。NHK TV 長野局が、番組のイブニング信州で拙著の書籍ランキング6位を報道した。これには正直いつて驚いた。好評理由は、友人の某大手監査法人理事長が、母校松本の同窓生に働き掛けてくれたのが端緒となった。この友人の働き掛けが無かったら、現在次作品の執筆の筆も鈍っていたと思う。この友には本当に感謝している。

地元埼玉では余り売れなかった。全国配本はやはり荷が重かった。所詮素人作家、全国的な知名度の低さはどうしようもなかったからだ。それでも、上尾シヨピングセンター内の高砂屋書店の某氏は、拙著を積極的に支援してくれた一人である。頭書から店頭平積み販売のみならず、店中央柱に地元作家という特別コーナーを設け、支援を継続してくれた。「次作も必ず店頭に平積みします」口約束ではあるがこの言葉は実に嬉しく励みになった。他にも、地元ダンス教室やスポーツ倶楽部の読書好きの仲間、PR面で世話になり感謝している。

今後は、執筆活動に精力と時間を割きたくて、今迄大学同窓会理事を拝命してきたが、幸い埼玉支部長職を辞し荷を軽くした。全国理事職の任は、暫くは余儀なくされるが、執筆が軌道に乗ったら何方かをお願いしようと思っ

ている。版元から僅かであるが、印税が入る知らせを受けた。気を良くし、次作品の執筆に着手した。温めていた安曇野舞台の書下ろし、「奇妙な猫たち」某彫刻家の話百二十枚を、余勢でリメイク作品「新雪国幻想」豪雪テーマ九十枚を夫々脱稿した。更に地元文芸関係者の知名度アップを狙い、文芸誌の投稿原稿用にと、三十枚と五十枚程の掌編を二本脱稿できた。これに三つの随想録を加えると、二ヶ月余りで実に三百枚の原稿用紙の枳目を埋めた計算となる。幾ら経験があるとはいえ、技術屋で飯を喰ってきた身である。然も十代、二十代の四十数年、約半世紀も前の実績である。この隠れたるエネルギーの噴出が、何処からきたのか我ながら不思議である。稚拙な同人誌「えぞうぶ」に原点があると気付いた。当然、一台のパソコンをフル稼働させた。

二作品を執筆するにあたり、参考図書として幾つかの文献を調査した。松本の母校高校には多くの文芸物の執筆者がいるのは、以前から知っていた。今回は初めて、特に後者の執筆の際、母校大学の先輩著作に囚らずも触れて嬉しかった。一人は「北越雪譜」の現代語監修者、もう一人は警女の歴史解説者であった。お二人とも教育学部卒の先輩である。前作の拙著「奇妙な喫茶店」執筆の際に、母校人文系学部卒業生の中に、文芸物作家がいるか？と母校教授にお尋ねしたことがある。意外にも、そうした御仁は居ないとの返事を得ていたからだ。

さて、拙著「奇妙な喫茶店」読者の反響は、二回随想録にて紹介した。「何故もつと早く書かなかったのか？」「同人誌活動から、作家を目指していると思っていた」があった。弁明する積りはないが、素人作家である限り、

今後モ年齢に拘る必要ないと考えている。今からでも、決して遅くないと思っている。一口としてデビューするには、還暦過ぎた年齢では確かに遅いのもかもしれない。芥川賞受賞者の例でも、十代、二十代と年齢が低年齢化が最近の傾向である。ネット作家もこの影響でか、三十代前それも十代が大半である。この傾向はある意味望ましいのかもしれない。

今後モ年齢に拘る必要ないと考えている。今からでも、決して遅くないと思っている。一口としてデビューするには、還暦過ぎた年齢では確かに遅いのもかもしれない。芥川賞受賞者の例でも、十代、二十代と年齢が低年齢化が最近の傾向である。ネット作家もこの影響でか、三十代前それも十代が大半である。この傾向はある意味望ましいのかもしれない。

江戸時代の昔、「北越雪譜」著者の鈴木牧之が全七巻最後の二編四冊を刊行したのは、何と七十二歳であったというから驚きである。この事実を最近知って、自信を深め意を強くした。今日でも、鈴木牧之は、特異な随想録作家として世間から認知され、越後塩沢町には記念館まで建設されている。「北越雪譜」この本は、今もなお多くの一般の人々に現代口語訳で読まれているから不思議である。それだけではない。秋山郷への紀行文「秋山紀行」「小説広大寺躍」「塩冶判官一代記」が出版され読まれているという。確かに昔は、牧之と親交があった太田蜀山人や十返舎一九の方が流行作家であったであろう。今では、一部の研究家や好事家が二人の作品を古典として読むかもしれないが、果して鈴木牧之の「北越雪譜」ほど一般の人々が読むかという疑問でならない。

吾が六十歳代は、自分でも結構充実した人生だと自負している。幸い、執筆日課が習慣化したので、早朝の四時、七時までの時間と、昼間の十時、十二時をそれに当て、趣味のダンスやスポーツ倶楽部の水泳も欠かすことなく継続できて

いるからである。